

1 リスクを考えよう

- 明日の天気予報、雨の確率は40%です。あなたは出かけるときに、もし雨が降った場合に濡れないよう傘を持っていきますか？それとも、雨は降らないと思い傘は持っていきませんか？

()傘を持っていく ()傘を持っていかない

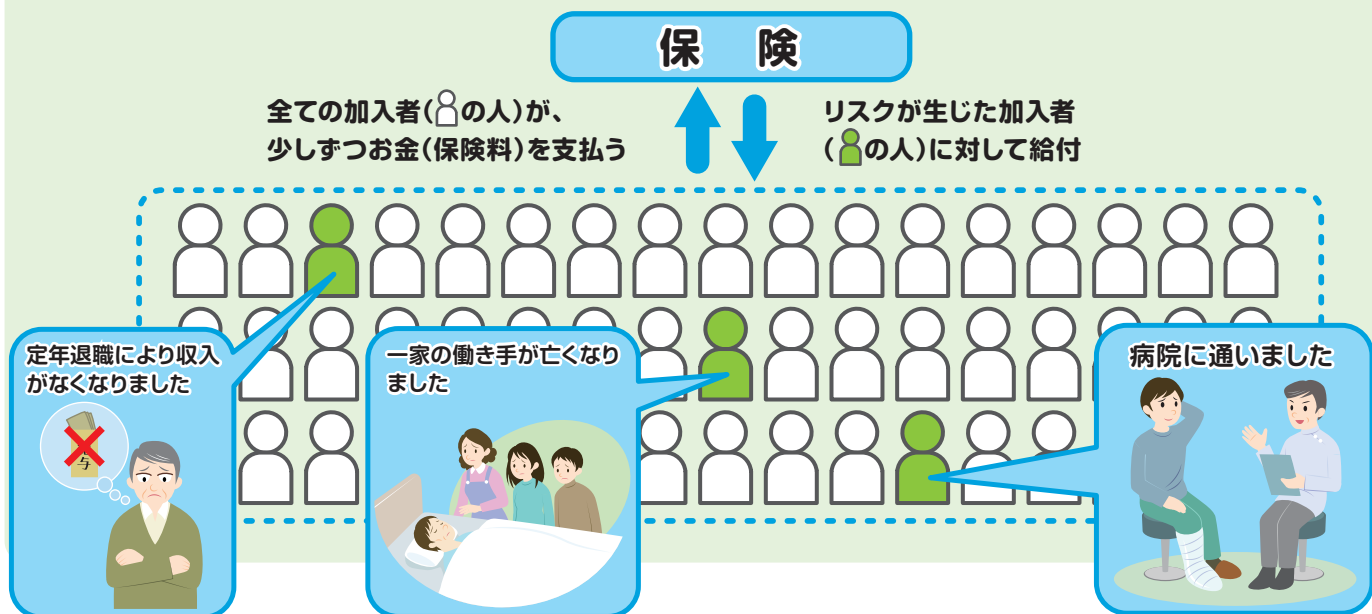
私たちの人生には、自分や家族の病気、障害、失業、死亡など様々なリスクが潜んでいます。このような、個人の力だけでは備えることに限界がある生活上のリスクに対して、幾世代にもわたる社会全体で助け合い、支えようとする仕組みが**社会保障制度**です。

2 社会保険と公的扶助

社会保険

社会保障制度の中心となる「**社会保険**」は、「保険」の仕組みを使った制度です。「保険」により給付を受けるためには事前に保険料を支払っておく必要があり、支払っていない場合には、給付を受けることができない仕組みになっています。「社会保険」では、保険料は、賃金などに応じて支払うこととなっており、会社員(会社に勤めている人)などが加入する「社会保険」では、会社(事業主)も保険料を支払う仕組みとなっています。「社会保険」の給付は加入者の「保険料」により賄われますが、一部、税金も投入されています([参考資料](#) [資料1])。

「保険」の仕組みとは？



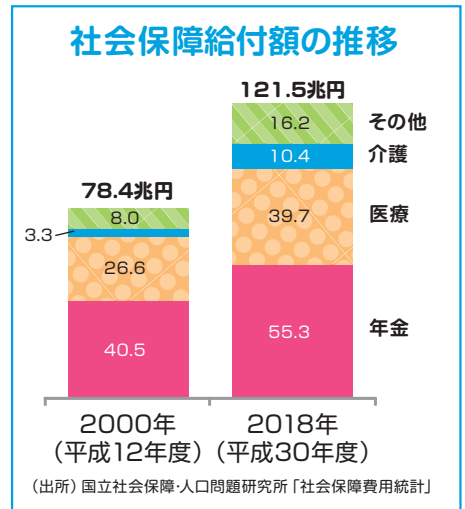
公的扶助

公的扶助制度は、生活に困窮する人々に対して、最低限度の生活を保障し、自立を助けようとする制度であり、税金により賄われています。この制度が憲法で定める生存権を最終的に保障しており、「社会保障の最後の**セーフティネット**」とされています([参考資料](#) [資料2])。

3 社会保障制度の財源

社会保障制度は社会全体で助け合い、支えようとする仕組みですが、財源のことを無視することはできません。急速に進む少子高齢化に直面している日本では、どのようなことを考えなければならないのでしょうか。例えば、現在の公的年金制度は、現役世代の保険料の負担が重くなりすぎないように なっています。具体的には、現役世代の支払う国民年金や厚生年金の保険料に上限(平成29年以降は固定)を設けています。

保険料に上限が定められた以上、その総額の範囲内で給付することになります。「負担」と「給付」のバランスを図ることが、今まで以上に必要となるため、自助・共助・公助のそれぞれを理解し、考えていくことが重要になります。

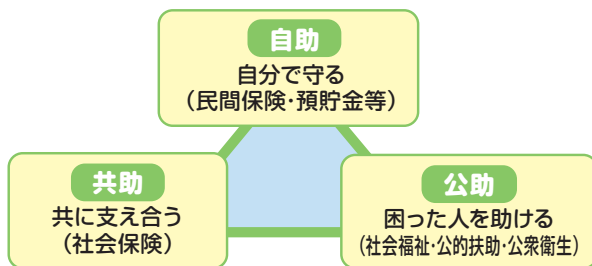


自助・共助・公助

日本の社会保障制度は、自らが働いて自らの生活を支え、自らの健康は自ら維持するという「自助」を基本としながら、高齢や疾病・介護を始めとする生活上のリスクに対しては、社会連帯の精神に基づき、共同してリスクに備える仕組みである「共助」が自助を支え、自助や共助では対応できない困窮などの状況については、受給要件を定めた上で必要な生活保障を行う公的扶助や社会福祉などの「公助」が補完する仕組みとす るものです。(社会保障制度国民会議報告書(平成25年8月6日)より)

4 自助と民間保険

「自助」の手段の中には、預貯金、民間保険、有価証券等も含まれますが、生命保険会社等が提供する「民間保険」では、リスクが生じた場合にあらかじめ生命保険会社等と契約した金額が支払われます。「民間保険」は、「社会保険」と同じ「保険」の仕組みを使っていますが、「社会保険」とは異なり、個人が必要であると判断した場合に加入し、また、保険料は、加入者のリスク(健康状態や年齢等)に応じて設定されます。「民間保険」には、「民間年金保険」・「民間医療保険」・「民間介護保険」・「民間死亡保険」など「社会保険」と同様の多様なリスクをカバーする商品があります(参考資料【資料3】・【資料4】)。



政府は、社会保障制度の持続可能性を確保するために、社会保障の負担と給付の見直しについて検討を進めていますが、私たちは、「自助」・「共助」・「公助」を適切に組み合わせていくことも考える必要があります。

課題 皆さんは、持続可能な社会保障制度を形成する上で、「自助」・「共助」・「公助」をどのような割合で組み合わせることが望ましいと思いますか。また、なぜそのような割合が望ましいと考えたのですか。「老後の生活費の準備」をイメージして考えてみましょう。

解答欄